

関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和6年度技術情報第27号（サツマイモのヒルガオハモグリガに対する殺虫効果試験）について（送付）

サツマイモのヒルガオハモグリガに対する主要農薬の殺虫効果試験について下記のとおり取りまとめましたので、周知およびご指導をよろしくお願いいたします。



なお、本情報は、病害虫防除所ホームページ（<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>）にも掲載しています。

令和6年度技術情報第27号

昨年のサツマイモほ場の達観調査（令和6年4月30日～5月1日、79ほ場）で、定植苗にヒルガオハモグリガの被害が認められ、被害の拡大したほ場も認められました。このため、今春も育苗床における本種の発生が懸念されます。

そこで、ヒルガオハモグリガの幼虫に対する主要農薬について殺虫効果試験を行いましたので、防除指導の参考にしてください。

- 1 対象作物 サツマイモ
- 2 対象病害虫 ヒルガオハモグリガ
- 3 供試虫 曾於市末吉町（末吉個体群）と志布志市松山町（松山個体群）の中齢幼虫

4 殺虫効果試験の結果と注意事項

1) 試験結果

- (1) 両個体群に対してディアナSC、アファームエクセラ顆粒水和剤、プロフレアSCは殺虫効果が高く、プレオフロアブルは殺虫効果が低かった（表1）。
- (2) 両個体群共にジアミド系農薬の殺虫効果がやや低く、食害面積も無処理区と同等であった（図1）。これまで使用頻度の高かったジアミド系農薬に対して、ヒルガオハモグリガの感受性が低下してきていることが考えられる。

2) 注意事項

- (1) 供試した農薬はサツマイモに登録があるものの（令和7年2月20日現在）、使用前には必ずラベル等を確認し、使用基準を遵守する。
- (2) 幼虫の農薬に対する感受性は生育に伴って低下するため、若齢期に防除する。
- (3) 育苗床でも発生している可能性があるため、発生を認めたら防除を行い、本ぼへの持ち込みを防ぐ。
- (4) ほ場の農薬散布状況によって殺虫効果は異なることが予想されるため、散布後は防除効果を確認する。また、実際の防除効果を示すものではないので、本結果の取り扱いに注意する。

表1 各種農薬のヒルガオハモグリガ中齢幼虫に対する殺虫効果

供試農薬名	RAC コード	系統	希釈倍数	ヒルガオハモグリガ中齢幼虫	
				末吉個体群 ^{a)}	松山個体群 ^{b)}
プレバソンFL5	28	ジアミト [®]	2,000	△	○
フェニックス顆粒水和剤	28	ジアミト [®]	6,000	△	○
ベネビアOD	28	ジアミト [®]	4,000	◎	○
ディアナSC	5	スピノシ [®]	2,500	◎	◎
アフームエクセラ顆粒水和剤	6	ミルベマイシ [®]	1,000	◎	◎
	15	ベンゾイル尿素			
プロフレアSC	30	メダジアミト [®]	2,000	◎	◎
プレオFL	UN	ピリダリル	1,000	×	△

1) 殺虫効果：中齢幼虫（3～5mm）の処理72時間後の補正死亡率を、×：0～30%未満、△：30～60%未満、○：60～80%未満、◎：80%以上で示す

2) 試験方法

供試虫：令和6年8月27日に曾於市末吉町と志布志市松山町の各サツマイモほ場から採集し、サツマイモ生葉で累代飼育した個体。

検定日：a) 令和7年1月22～25日、b) 同年1月24～27日

検定法：所定倍数で希釈した薬液にサツマイモ葉を30秒間浸漬して、風乾した。その後、処理葉を湿らせたろ紙を敷いた飼育容器（直径9cm）内に置き、幼虫を末吉個体群は5頭、松山個体群は10頭放飼し、3反復で検定した。放飼後の飼育容器は25℃設定の室内に静置した。

展着剤：ベタリンA 10,000倍を加用

補正死亡率：3反復の死亡率の平均値を用いて、 $\{(処理区死亡率 - 無処理死亡率) / (100 - 無処理死亡率)\} \times 100$ で算出



図1 末吉個体群における無処理（左）とフェニックス顆粒水和剤（右）の食害（処理72時間後）